

大西脳神経外科病院だより 第46号

ぶれいん

発行日：令和5年5月吉日

発行：学術図書委員会

発行責任者：大西 宏之

編集責任者：吉野 孝広

新しい時代に向けて

医療法人社団英明会
大西脳神経外科病院

理事長・院長 大西 宏之

2023年4月1日、医療法人 社団英明会大西脳神経外科病院理事長・院長に就任致しましたのでご挨拶申し上げます。当院は2000年12月に開院し、2020年12月に20周年を迎え、そして今年で23年目に突入致します。

しかし、近年のコロナ禍によって少し全体的な雰囲気停滞気味なところがあるように思います。コロナが明けつつある今、新しい気持ちで次の時代へ進もうという思いもありこの度、世代交代をすることになりました。

この20年間において、当院は東播磨地区において脳神経外科分野における急性期医療の確立を目指し、皆様に支えられながら、おかげさまで全国的にも脳神経外科の急性期であれば「大西脳神経外科病院」と知っていただけるまで成長させることができました。

何もないゼロからのスタートで、このように全国的な規模になったことについては、会長の強いリーダーシップもさることながら、ともに走って頂いた医師をはじめ、職員の皆様がいたからこそでもあります。その多大なるご厚情に、心より感謝を申し上げたいと思います。



さて、このように 20 年を迎えましたが、当然ながらこれで「終わり」ではありません。これから先、新しい時代に向けて医療法人として、そして脳神経外科専門病院として我々はさらに成長しなければなりません。当院が今後何を目標に成長し、そしてこの東播磨地区の皆様にとどのように貢献していくのか、その方向性について考えてみたいと思います。今後はこれまでの「攻め」の姿勢に加え、徹底した「守り」の姿勢と原点回帰が重要と考え、次の 3 つの取り組みを柱として掲げてみたいと思います。

今までの当院は、最新医療技術の向上を目指して成長してきましたが、今後は「医療安全、危機管理対策」、そして「人間力の育成、自立したチームづくり」といったものにも注力していきたいと思っています。



1. 「医療安全、危機管理対策」
2. 「職員個々の人間力の育成と、責任感を持って自立したチームづくり」
3. 「最先端の医療レベルの向上、及び IT, AI などの最新技術の導入」

「攻めの姿勢を崩さずに、加えて徹底した守りと、原点回帰が重要と考えます」

開院20周年を迎えた2020年12月、コロナ禍真っ只中の折に、当院は初めて院内クラスターとなり、病棟閉鎖という未曾有の事態を経験しました。職員一丸で未知なるウイルスと対峙する中で、当時私は、医療安全部長を務めておりましたが、この時改めて不測の事態にも揺るがない盤石の守りの経営地盤が必要であると痛感しました。これまでの医療安全、感染対策だけでなく、自然災害や不祥事、最近ではコンピュータウイルスなど、「医療行為を脅かすあらゆる不測事態が、今後もし起こり得る」という認識を持って、気持ちを新たにしなければならぬことを強く感じています。



地域の健康を第一に守る医療施設が、機能停止となる事態は絶対に避けなければなりません。徹底した危機管理、安全対策を、一つの柱として取り上げさせて頂きました。次に、二つ目として掲げている「職員個々の人間力の育成と、責任感を持って自立したチームづくり」についてですが、この方針は、医療の原点はやはり「人との関わりである」という基本に立ち返った考えによるものであります。

医療というのは患者さんとの関わりの中で、お互いの信頼関係がなければより良い医療を行うことができません。しかし、近年のこのコロナ禍によって、マスク越しでの会話であったり、特に院内行事がことごとく中止となっている影響もあってか、職員同士の人間関係の希薄化、チームとしての統一感が低下しているように感じています。

「患者さんを、まさに自分の家族として親身になって対応する」

また、入院患者さんにおいても面会が制限されたりと不安感も募ることが多いためか、ちょっとしたことでトラブルになることが増えているように思います。今やいくらITやAIなどの最新技術の時代であるとはいえ、やはり病院というのは最終的には職員の人間力がものをいうところだと思っています。



患者家族との信頼関係をきちんと構築し、「患者さんを、まさに自分の家族として親身になって対応する」という思いを常に持って頂きたいと思います。これを機に原点回帰、職員個々の人間力を向上し、責任を持ち、自立して行動ができるチームづくりをしていければと思います。

最後の三つ目は、「最先端医療の向上」を挙げておりますが、これは当院が今まで取り組んできた姿勢を崩すことなく、踏襲してやっていきたいと思っています。当院はこの20年で本当に様々なことが起こり、新たな課題が生まれました。この様々な環境の変化とともに歩んだ経験を活かし、この3つの柱を今後は徹底していきたいと思っています。これまでの攻めの姿勢に加え、柔軟な「守り」を意識していくことをこれからの強みとして、東播磨地域の皆様にさらに安心してご利用いただける病院となることを目指していきたいと思っています。



続きまして法人全体としての取り組みですが、近年、脳卒中診療において、地域における急性期医療の集約化や急性期診療だけでなく、回復期医療や慢性期の在宅医療などの重要性も再認識されるようになりました。

当院は脳卒中学会が定める一次脳卒中センターコア施設に昨年認定されることになりましたが、このコア施設認定

を受けるにあたり、脳卒中相談窓口の設置も義務化されました。これまで当院は、急性期医療の確立に特化して参りましたが、急性期医療だけでなく、慢性期、維持期など包括的な医療が求められる時代へと移り変わりつつありますので、今後は回復期医療、在宅期医療にも注力していかなければなりません。そして最終的な目標として、脳卒中の予防から急性期治療、回復期、在宅医療までを当法人が包括的に管理し、この東播磨地域住民の健康管理、寝たきりにならないための健康増進を、脳神経疾患を通じて還元していくことを当法人の将来展望したいと思います。



コロナウイルス感染症の影響は大きく、予断が許されない状況が続いています。そうした中、最大限の注意を払いながら、さらに新しい取り組み、事業展開をしていかななくてはなりません。

コロナ真っ只中では部署によっては残業など職員の皆さんに大きな負担が生じていることを、病院側としては重々理解しています。



当法人は医療の根幹を支えていただいている皆さんのお気持ちに配慮して、しっかり応えることができるよう準備を整えて参ります。これからも様々な環境の変化が訪れてくることが予測されます。しかし、どのような変化が起きようとも、職員一同が一丸となり、変化し続ける状況に柔軟に対応しながら、次の時代に突き進んでいきたいと思っています。皆さん、これからも引き続きよろしくお願い致します。



「変化に柔軟に対応しながら一致団結し次の時代に突き進む」

「ありがとうございました」

医療法人社団英明会 会長 大西 英之



2023年3月末をもちまして理事長を退任いたしました。2000年に開院して以来、幾多の試練がありましたが、その都度、数知れぬ多くの方々にお世話になりました。ここに、心からの感謝と御礼を申し上げます。私が生まれ育ったこの東播磨の地に脳卒中を初めとする脳神経外科の地域医療に少しでも貢献できたか

などと思いますが、それを可能としたのは行政、医師会、職員、関係業者様など数知れぬ多くの方々のご理解、ご尽力やご協力があったからです。改めて深甚の謝意を申し上げます。

今後とも大西脳神経外科病院が末長く地域医療に貢献出来ますよう、新理事長初め職員一同、研鑽と努力を続けて参りますのでご指導ご鞭撻のほどよろしくお願い申し上げます。

院長退任と

名誉院長就任のあいさつ

名誉院長 久我 純弘



2019年4月に院長に任命され、その5月に令和元年となりました。それから4年が経ち2023年3月に院長を退任し4月からは名誉院長を拝命いたしました。在任中、最も苦労したことは新型コロナウイルス感染症対応でした。2019年末に中国で確認されてから世界中に感染は拡大し未だ完全な終息には至っていません。新型コロナ対応に重点がおかれましたが、その間も脳卒中をはじめこれまで日常にみられた病気がなくなるわけではありません。

そのため、厳重な新型コロナ対策をとりながら救急医療を含め通常の医療提供を継続しました。

特に救急においては全例感染者と同様の対応が求められるので感染防御のためN95マスクなどのPPEが必要となり、MRIなどの検査ではヘッドコイルをはじめ接触した機器を毎回消毒するなど非常に労力を要します。

それでも正確な急性期脳梗塞の診断にはMRI検査が必須であり結果次第では血栓回収術を始めとする緊急手術にも対応してきました。また、急性期病棟運営では全例で入院直前に新型



春の訪れとともに心も明るく良質な医療を提供するために



コロナの検査をするわけですが、後で陽性となる場合もあり、これまでの疾患群単位の病棟編成から主にコロナ感染防御目的にコロナ病床、検疫ゾーン、HCU、SCU、陰性確認後の予定入院病棟など一部編成を変える必要もありました。新型コロナ対応が集中する病棟ではスタッフの悲鳴も聞こえてきましたがそれでも全員が頑張ってくれました。本当に感謝しています。オミクロン株への変異が進み、第7、8波と爆発的に感染が広がりましたが一方で毒性が低下し重症者が激減しました。ようやく2023年5月には2類から5類感染症に移行するまでに下火になってきたようです。ようやく長いトンネルを抜け明るい春が来た気分です。時を同じくして私も退任して新院長、副院長が就任し病院も若返ります。コロナ禍においては感染防止に主眼がおかれ入院患者さんの環境、面会なども制限されコミュニケーションに問題が生じました。

同じようにこの3年間、歓送迎会、忘年会、さらに20周年記念など一切の病院イベントは中止され病院スタッフ間でもマスクを通しての接触ばかりで素顔も分からずコミュニケーション不足で明るさが薄れた印象もあります。まだしばらくは病院内ではマスクが必要と思われますが、これからの春の訪れとともに心も明るく開放的なコミュニケーションを通して良質な医療が提供されることを期待します。4年間どうもありがとうございました。

一方、これからも管理職は退きますが病院のため地域医療のため努力を続けていきたいと思っておりますのでよろしくお願いいたします。

「楽しみ」や「やりがい」を実感できる環境

副院長 脊椎・脊髄センター長 山本 慎司

このたび病院の体制刷新にあたり、副院長職を拝命いたしました。責任の重さを感じながら、皆さまの期待に応えられるよう日々努力してまいります。

本院の存在意義は非常に大きいものです。国内有数の神経疾患診療施設で、さまざまな脳・脊椎脊髄・末梢神経疾患に対し24時間365日にわたり質の高い診療を提供し続けています。

「もっと多くの神経疾患の診療に携わり、たくさんの経験を積みたい」、「もっと自分の知識や技術を高めたい」「これまでの自分の経験や長所を生かし、たくさんの患者さんの治療に当たりたい」といったスキルアップ、キャリアアップを望む高い志を持った医療関係者が集まり、日々社会に貢献しているプロフェッショナル集団です。社会人になりたてのホープから経験豊富な百戦錬磨のベテランまで、様々なスタッフが一丸となって活動しています。

医療を通じて「幸福」を提供する

これからもこの組織を強く大きくし、社会の変化に対応しさまざまなニーズに応えてゆきます。日本、世界はどんどん様変わりしています。世界的な感染症パンデミックも終息目前で、物価高騰、人流拡大、AI技術普及、宇宙進出など、直近数年の間だけでも世の中は大きく変わりそうです。ただ今後どれだけ社会が変わろうとも、病院組織が目指す所は医療を通じ様々な「幸福」を提供する

ことです。高度な医療技術はもちろん、心細やかな看護、熱心なりハビリテーション、安心できるサービス、美味しい食事、ためになる医療情報などを提供された患者さんとその家族はもちろんですが、それに関わるすべての病院関係者も幸せになることが必要です。私自身もそうですが、多忙で周辺を見渡す余裕がなくなってくると、眼前にあるたくさんの「幸せ」に気づかなくなります。やりがいを感じにくくなり、人も組織も疲弊してゆく悪循環に陥ります。国策でもある多職種の勤務体系改革によるタスクシフトも一つの手段ですが、やはり組織としては全スタッフが一丸となり幸せを提供できている達成感、つまり「やりがい」を感じられることが必要です。

さあ皆さんと一緒に、これからたくさんの「楽しみ」と「やりがい」を日々感じられる幸せな組織環境を作ってまいりましょう。



「微力ながら」

脳腫瘍・頭蓋底外科センター長

高橋 賢吉

2023年4月に脳腫瘍・頭蓋底外科センター長を拝命いたしました。2013年12月に当院に入職して約10年になりますが、大西会長をはじめ先輩方の指導の下で多くの症例を経験させていただきました。いままで培ってきた経験と技術をもとに、微力ながら特に脳腫瘍・頭蓋底外科手術をメインとして治療に貢献させて頂ければと考えております。脳腫瘍は、脳卒中や脊椎疾患と違い、疾患の数は多くはありません。さらに団塊の世代が後期高齢者となり、脳腫瘍治療の対象患者が高齢化することで、特に良性の脳腫瘍においては、手術治療の対象となる症例は徐々に減少することが予想されます。

脳腫瘍・頭蓋底外科センターとして手術件数を増やすことも重要ですが、特に高齢者に関しては、余命を考慮して外科的手術をすべきかどうかを十分に考慮する必要があります。



手術をする場合には、術前に脳血管内治療による栄養動脈塞栓術を行うことで術中の出血を減らすことや、内視鏡を用いた低侵襲手術、全摘出のリスクの高い症例はあえて部分摘出にとどめる等、患者さんの状態に合わせて、低侵襲で安全な手術を行うことが重要と考えています。また術中MRIやナビゲーションを用いた腫瘍の摘出率の向上や術中神経モニタリングによる神経の機能温存も大切です。

近年の内視鏡技術の発展は目覚ましく、従来より下垂体病変のみが適応とされていた経鼻的手術は頭蓋底外科手術の領域へとその適応を広げています。内視鏡下頭蓋底アプローチでは、前頭蓋底、傍鞍部、斜台をはじめとし、従来到達が困難であった部位に到達可能となっています。

治療後によりよい人生が送れるような手助けを

当院でも脳神経内視鏡技術をより向上させ、頭蓋底外科手術にも安全に適応できるようになることが今後の課題と考えています。また頭蓋底外科手術に関しては、手術症例が少なく稀な疾患であることから、今後は術者をある程度限定し、限られた症例の中でも、技術を伝承していくことが必要です。

脳腫瘍を患う患者様に、必要な治療を最善の方法・最高の技術で提供し、治療後によりよい人生が送れるような手助けができればと考えております。

